

ϵ -pTeX について

北川 弘典*

version 220214, 2022 年 4 月 5 日

目次

1	はじめに	2
2	ϵ -TeX 拡張について	2
3	Ω 由来の機能 (旧名称: FAM256 パッチ)	6
4	pdfTeX 由来の機能	9
5	ϵ -pTeX の追加プリミティブ	12
5.1	バージョン番号	12
5.2	<code>\lastnodechar</code> プリミティブ	12
5.3	<code>\lastnodefont</code> プリミティブ	14
5.4	<code>\lastnodesubtype</code> プリミティブ	15
5.5	<code>\epTeXinputencoding</code> プリミティブ	17
5.6	用紙の原点位置の設定, <code>\readpapersizespecial</code> プリミティブ	17
5.7	<code>\current[x]spacingmode</code> プリミティブ	18
6	Unicode TeX 由来の機能	18
6.1	<code>\Uchar, \Ucharcat</code> プリミティブ	18
6.2	エラー抑制 (<code>\suppress...error</code>)	20
7	TeX Live による拡張	20
7.1	デバッグ機能 (<code>\tracing...</code>)	20
7.2	<code>par</code> トークンの制御	21
7.3	<code>\show</code> 系コマンドの出力制御	22

* <http://osdn.jp/projects/eptex/wiki/>, e-mail: h_kitagawa2001@yahoo.co.jp

1 はじめに

ε -p $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ は、東京大学理学部数学科 3 年生対象の 2007 年度の授業「計算数学 II」^{*1}において北川が作成したプログラムである。もともとは p $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 3.1.10 を基盤として、 ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 2.2 相当の機能や 10 進 21 桁の浮動小数点演算を追加したものであったが、今では次の点が変わっている。

- $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Live 2011 に取り込まれるにあたり、 ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ をベースにして、その上に p $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 拡張やその他追加機能を載せる方針へと変更された。
- 浮動小数点演算の機能は ε -p $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 090927 から削除されている^{*2}。

製作の動機や作業過程などについては、詳しくは [1] を参照して欲しいけれども、大雑把に言うと、動機は以下のように要約できる。

- p $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ は、 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ が持っている「レジスタ 1 種類につき 256 個まで」という制限をひきずっており、現状でも非常に多数のパッケージを読み込ませたりすると制限にぶち当たってしまう。
- 一方、 ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 拡張ではこれが「レジスタ 1 種類につき 32768 個まで」と緩和されており、欧文で標準となっている pdf $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ やその後継の Lua $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 、及び X $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ でも ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の機能が取り込まれている。
- そうすると、p $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ だけが制限をレジスタ制限を引きずっているのは世界から取り残されることになるのではないか。

2 ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 拡張について

前に述べたように、 ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ は $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の拡張の一つである。 ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ のマニュアル [16] には、開発目的が以下のように述べられている。

The $\mathcal{N}\mathcal{T}\mathcal{S}$ project intends to develop an ‘New Typesetting System’ ($\mathcal{N}\mathcal{T}\mathcal{S}$) that will eventually replace today’s $\text{T}_{\text{E}}\text{X}3$. The $\mathcal{N}\mathcal{T}\mathcal{S}$ program will include many features missing in $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$, but there will also exist a mode of operation that is 100% compatible with $\text{T}_{\text{E}}\text{X}3$. It will, necessarily, require quite some time to develop $\mathcal{N}\mathcal{T}\mathcal{S}$ to maturity and make it widely available.

Meanwhile ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ intends to fill the gap between $\text{T}_{\text{E}}\text{X}3$ and the future $\mathcal{N}\mathcal{T}\mathcal{S}$. It consists of a series of features extending the capabilities of $\text{T}_{\text{E}}\text{X}3$.

$\mathcal{N}\mathcal{T}\mathcal{S}$ がどうなったのか僕は知らない。しかし、少なくとも ε - $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 拡張自体は実用的な物であり、そのせいか \aleph (Aleph), pdf $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$, X $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ などの他の拡張にもマージされており、ほとん

^{*1} <http://ks.ms.u-tokyo.ac.jp/>.

^{*2} $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ソース中で浮動小数点演算を行う手段としては、例えば L $\text{T}_{\text{E}}\text{X}3$ の機能 (l3fp) や、xint パッケージバンドルがあるので、そちらを利用して欲しい。

どの人が ϵ -TeX 拡張を使うことができるようになっている*3.

ϵ -TeX 拡張で追加される機能について、詳しくは [16] を参照して欲しいが、[1] 中の 4.2 節「 ϵ -TeX の機能」から一部改変して引用する。

ϵ -TeX には Compatibility mode と Extended mode の 2 つが存在し、前者では ϵ -TeX 特有の拡張は無効になるのでつまらない。後者がおもしろい。

拡張機能を使うにはファイル名を渡すときに * をつけるかコマンドラインオプションとして `-etex` スイッチをつけなければならないが、 ϵ -TeX 拡張に関わる追加マクロは当然ながらそれだけでは駄目である。「plain マクロ for ϵ -TeX」(`etex.fmt` というのが一番マシかな) では自動的に追加マクロである `etex.src` が呼ばれる。L^AT_EX 下ではちょうど `etex.src` に対応した `etex` パッケージを読み込む必要がある。

■レジスタの増加

最初に述べたように、TeX では 6 種類のレジスタが各 256 個ずつ利用できる。それぞれのレジスタには `\dimen75` などのように 0-255 の番号で指定できる他、予め別名の定義をしておけばそれによって指定することもできる。これらのいくつかは特殊な用途に用いられる (例えば `\count0` はページ番号などのように) ことになっているので、さらに `user` が使えるレジスタは減少する。

ϵ -TeX では、追加のレジスタとして番号で言うと 256-32767 が使用できるようになった。上の pdf によると最初の 0-255 と違って若干の制限はあるようだが、それは些細な話である。追加された (各種類あたり) $32768 - 256 = 32512$ 個のレジスタは、メモリの効率を重視するため `sparse register` として、つまり、必要な時に始めてツリー構造の中で確保されるようになっている。

■式が使用可能に

TeX における数量の計算は充実しているとは言い難い。例えば、

$$\backslash\dimen123 \leftarrow \frac{1}{2}(\backslash\dimen42 + \backslash@tempdima)$$

という計算を元々の TeX で書こうとすると、

```
\dimen123=\dimen42
\advance\dimen123by\@tempdima
\dimen123=0.5\@tempdima
```

のように書かないといけない。代入、加算代入、乗算代入、除算代入ぐらいしか演算が用意されていない状態になっている (上のコードのように、 $d_2 += 0.8d_1$ というような定数倍を冠することは平気)。

ϵ -TeX では、そのレジスタの演算に、他のプログラミング言語で使われているような数式の表現が使えるようになった。上の PDF では実例として

```
\ifdim \dimexpr (2pt-5pt)*\numexpr 3-3*13/5\relax + 34pt/2<\wd20
```

*3 L^AT_EX 2_ε 2017-01-01 からは、L^AT_EX 2_ε のフォーマット作成段階から ϵ -TeX 拡張が必須となった ([19])。

が書かれている。これは、

$$32 \text{ pt} = (2 \text{ pt} - 5 \text{ pt}) (3 - \text{div}(3 \cdot 13, 5)) + \frac{34 \text{ pt}}{2} < \text{\box20 の幅}$$

が真か偽かを判定していることになる。

■ `\middle primitive`

\TeX に `\left`, `\right` という primitive があり、それを使えば括弧の大きさが自動調整されるのはよく知られている。 $\varepsilon\text{-TeX}$ では、さらに `\middle primitive` が追加された。

具体例を述べる。

$$\left\{ n + \frac{1}{2} \mid n \in \omega \right\} \left\{ n + \frac{1}{2} \mid n \in \omega \right\}$$

これは以下の source で出力したものである：

```
\def\set#1#2{\setbox0=\hbox{\$ \displaystyle #1,#2$}%
  \left\{\, \vphantom{\copy0}#1 \, \right\|\! \left.\, %
  \vphantom{\copy0}#2 \, \right\}}
\def\eset#1#2{\left\{\, #1 \, \middle|\, #2 \, \right\}}
\[\set{n+\frac{1}{2}}{n \in \omega} \eset{n+\frac{1}{2}}{n \in \omega} \]
```

両方とも集合の表記を行うコマンドである。 \TeX 流の `\set` では 2 つの `\left`, `\right` の組で実現させなければならず、そのために | の左側と右側に入る式の最大寸法を測定するという面倒な方法を使っている。その上、この定義では `\textstyle` 以下の数式（文中数式とか）ではそのまま使えず、それにも対応させようとすると面倒になる。一方、 $\varepsilon\text{-TeX}$ 流の `\eset` では、何も考えずに `\left`, `\middle`, `\right` だけで実現できる。

■ `\TeX--XeT` (`TeX--XeT`)

`left-to-right` と `right-to-left` を混植できるという機能であるらしい。ヘブライ語あたりの組版に使えるらしいが、よく知らない。ここでの `RtoL` は `LtoR` に組んだものを逆順にしているだけのよう気がする。

とりあえず一目につきそうな拡張機能といったらこれぐらいだろうか。他にも `tracing` 機能や条件判断文の強化などがあるが、そこら辺はパツとしないのでここで紹介するのは省略することにしよう。

$\varepsilon\text{-pTeX}$ ではここに述べた代表的な機能を含め、ほとんどすべての機能を実装しているつもりである*4。ただ、`\TeX--XeT` を和文で使うと約物の位置がずれたり空白がおかしかったりするけれども、その修正は大変に思えるし、苦勞して実装する意味があるのか疑問なので放置している。

以下、 $\varepsilon\text{-TeX}$ 拡張を pTeX 拡張とマージするにあたって調整した箇所を述べる。

*4 さらに、レジスタの個数については、各種類 65536 個まで使えるようになっている（次節参照）。

▶ `\lastnodetype` (read-only integer)

pTeX 拡張では、TeX と比較して `dir_node` と `disp_node` という 2 種類のノードが追加された。前者は、現在のリストの中に違う組方向の box を挿入する際に寸法を補正するために作られ、`\hbox` や `\vbox` のコンテナとなっている。また後者は、欧文文字のベースライン補正のために使われる。

ϵ -pTeX 110102 まではこれらのノードも `\lastnodetype` の値として出力させるようにした。しかし、両者ともに ϵ -pTeX が自動的に挿入する（ユーザーが意識する必要はない）ノードであることから、 ϵ -pTeX 110227 以降では `dir_node` と `disp_node` は `\lastnodetype` の対象とする「最後のノード」とはならないようにしている^{*5}。

-1: none (empty list)	5: mark node	11: glue node
0: char node	6: adjust node	12: kern node
1: hlist node	7: ligature node	13: penalty node
2: vlist node	8: disc node	14: unset node
3: rule node	9: whatsit node	15: math mode nodes
4: ins node	10: math node	

▶ `\currentifttype` (read-only integer)

条件判断文とそれを表す数字との対応は以下のようになっている（ ϵ -pTeX 190709 以降）。21, 22 は pdfTeX 由来の条件判断文（後述）、23-32 が pTeX 拡張で追加された条件判断文に対応する。

1: <code>\if</code>	12: <code>\ifvbox</code>	23: <code>\iftdir</code>
2: <code>\ifcat</code>	13: <code>\ifx</code>	24: <code>\ifydir</code>
3: <code>\ifnum</code>	14: <code>\ifeof</code>	25: <code>\ifddir</code>
4: <code>\ifdim</code>	15: <code>\iftrue</code>	26: <code>\ifmdir</code>
5: <code>\ifodd</code>	16: <code>\iffalse</code>	27: <code>\iftbox</code>
6: <code>\ifvmode</code>	17: <code>\ifcase</code>	28: <code>\ifybox</code>
7: <code>\ifhmode</code>	18: <code>\ifdefined</code>	29: <code>\ifdbox</code>
8: <code>\ifmmode</code>	19: <code>\ifcsname</code>	30: <code>\ifmbox</code>
9: <code>\ifinner</code>	20: <code>\iffontchar</code>	31: <code>\ifjfont</code>
10: <code>\ifvoid</code>	21: <code>\ifincsname</code>	32: <code>\iftfont</code>
11: <code>\ifhbox</code>	22: <code>\ifpdfprimitive</code>	

▶ `\fontcharwd`, `\fontcharht`, `\fontchardp`, `\fontcharic` (dimension)

基本的にフォント内の文字の寸法を内部長さとして返す命令であるが、欧文フォントと和文フォントを判別し、それに応じて処理が分かれる。それに伴い、許容される引数範囲と意味が異なることに注意（ ϵ -pTeX 190709 以降）。以下、?? は `wd`, `ht`, `dp`, `ic` のいずれかを表す。

- 和文フォントの場合：`\fontchar??` \langle Japanese font \rangle \langle number \rangle
 \langle Japanese font \rangle を f , \langle number \rangle を c とおくと、
 - $c \geq 0$ の場合は、 c を**文字コード**とみなす。 c が和文文字コードとして有効であら

^{*5} 最後のノードが `dir_node` であった場合、`\lastnodetype` はそのノードが格納している `hlist_node` か `vlist_node` の種類を返す。

ば、和文フォント f における文字コード c の和文文字の寸法値を返す。和文文字コードとして無効であれば 0pt を返す。

– $c < 0$ の場合は、 $-(c+1)$ を**文字タイプ**とみなす。和文フォント f に文字タイプ $-(c+1)$ が定義されていればその寸法値を返し、未定義であれば 0pt を返す。

- 欧文フォントの場合：`\fontchar?? <8-bit number>`
オリジナルの ϵ -TeX と同じ挙動である。すなわち、引数に $c \geq 256$ や $c < 0$ を与えると ! Bad character code (256). のようにエラーが出る。

▶ `\iffontchar <number>`

- 和文フォントの場合：`\iffontchar <Japanese font> <number>`
`<Japanese font>` を f 、`<number>` を c とおくと、
 - $c \geq 0$ の場合は c を**文字コード**とみなし、 c が和文文字コードとして有効かどうかを判定する*6。
 - $c < 0$ の場合は $-(c+1)$ を**文字タイプ**とみなし、和文フォント f に文字タイプ $-(c+1)$ が定義されているかどうかを判定する。
- 欧文フォントの場合：`\iffontchar <8-bit number>`
オリジナルの ϵ -TeX と同じ挙動である。すなわち、引数に $c \geq 256$ や $c < 0$ を与えると ! Bad character code (256). のようにエラーが出る。



上記で「和文文字コードとして有効かどうか」は、関数 `is_char_kanji` を参照。この関数は内部コードによって異なるため、マクロで実装するのは面倒であるが、 ϵ -pTeX 190709 以降では `\iffontchar` で容易に実現できる。なお、upTeX では任意の非負の値が和文文字コードとして有効なため、`is_char_kanji` は非負かどうかの判定になっている。

3 Ω 由来の機能 (旧名称：FAM256 パッチ)

ϵ -pTeX には、掲示板 TeX Q & A の山本氏の書き込み [2] に刺激されて作った、本節で説明する Ω の一部機能を使えるようにするパッチが存在する。これは FAM256 パッチと呼ばれ、今までは「 ϵ -pTeX 本体とは一応別扱いで、 ϵ -pTeX の配布、及び W32TeX、TeX Live のバイナリでは標準で有効になっていただけ」という扱いであったが、それでは利用者が混乱するので「**FAM256 パッチは ϵ -pTeX 160201 以降からは切り離さない**」とここで宣言する。本ドキュメントの最後のページ*7にちょっとしたサンプルを載せてある。

本節で述べる追加機能は `extendend mode` でなくても有効になっている。ただし、後に説明する「レジスタが各種類 65536 個まで」は、`extended mode` の時に限り有効になる。

■数式フォント制限の緩和

Ω の大きな特徴としては、TeX 内部のデータ構造を改変し*8、TeX に従来から存在してい

*6 pTeX では「任意の和文フォントには、和文文字コードとして有効な全ての文字が存在する」という扱いであるため、和文フォント f によらない。

*7 ただし、ソースファイルで言えば `fam256d.tex` (本文) と `fam256p.tex` (preamble 部) に対応する。

*8 詳しくは `texk/web2c/texmfmem.h` 中の共用体 `memoryword` の定義を参照。大雑把に言うと、1 つの「メモリ要素」に 2 つの 32bit 整数を同時に格納できるようになっている。なお、少なくとも `tetex3` 以降では

たいくつかの「256 個制限」を 2^{16} 個にまで緩和したことが挙げられる。同様に、 Ω では ([2] にもあるように) 数式フォントを同時に 256 個まで用いることができ、各フォントも 65536 文字まで許されるようになっている。

ε -pTeX では、中途半端だが、数式フォント 1 つあたりの使用可能文字数は 256 個のままで、同時に数式フォントを 256 個まで使えるようにしている。基本的には Ω と同様の方法を用いているが、内部でのデータ構造に違いがある (数字はすべて bit 幅) :

	category	family	char	math code	delimiter code
TeX82	3	4	8	$3 + 4 + 8 = 15$	$3 + \underbrace{4 + 8}_{\text{small}} + \underbrace{4 + 8}_{\text{large}} = 27$
Ω	3	8	16	$3 + 8 + 16 = 27$	$(3 + \underbrace{8 + 16}_{\text{small}}, \underbrace{8 + 16}_{\text{large}}) = (27, 24)$
ε -pTeX	3	8	8	$3 + 8 + 8 = 21$	$(3 + \underbrace{8 + 8}_{\text{small}}, \underbrace{8 + 8}_{\text{large}}) = (19, 16)$

TeX に本来あったプリミティブは互換性維持のために同じ動作とする必要があるので、16 番から 255 番のフォントを利用するには別のプリミティブが必要となる。(実装自体に Ω の流儀を使っているから) ここでは、 Ω のプリミティブ名を流用することにした。すなわち、以下のプリミティブが追加されている*9。

- ▶ `\omathcode <8-bit number>=<27-bit number>`
- ▶ `\omathcode <8-bit number>`
- ▶ `\omathchar <27-bit number>`
- ▶ `\omathaccent <27-bit number>`
- ▶ `\omathchardef <control sequence>=<27-bit number>`
- ▶ `\odelcode <8-bit number>=<27-bit number> <24-bit number>`
- ▶ `\odelimiter <27-bit number> <24-bit number>`
- ▶ `\oradical <27-bit number> <24-bit number>`

ここで、27 bit とか 24 bit の自然数の意味については、上の表の Ω の行を参照して欲しい。上に書いた内部のデータ構造から推測できる通り、`\omathchar` 等の character code の指定に使われる 16 bit の数値のうち実際に使われるのは下位 8 bit であり、上位 8 bit は無視される。例えば、`\omathchar"4012345` と `\omathchar"4010045` は同義である。

なお、`\mathcode <8-bit number>` として math code 値を取得できる文字はファミリー番号が 16 未満のもの (すなわち、TeX82 における `\mathcode` 格納値の形式に当てはまるもの) に限られる。delimiter code についても同様である。さらに、`\odelcode <8-bit number>` として

memoryword は 8 バイトであるが、TeX82 では 1 つの「メモリ要素」を 2 つの 32 bit 整数として使うことはしていない。

*9 Ω では `<8-bit number>` のところが `<16-bit number>` になっている。

51 bit の形式の delimiter code を取得することはできない (-1 が返る).

L^AT_EX において数式フォントを同時に 16 個以上使うには、`\omathchar` などのプリミティブに対応したマクロを使う必要がある. 最近の pL^AT_EX (2016/11/29 以降) はこれを部分的にサポートしていて、`\DeclareMathAlphabet` で使うことのできる数式用アルファベットの上限だけは 256 個に拡張されている. だが、これだけでは記号類の定義に用いられる `\DeclareMathSymbol` や `\DeclareMathDelimiter` が `\omathchar` や `\odelcode` を使用しないので不十分である. 実験的と書かれてはいるが、山本氏による「最低限のパッケージ」[4]、またはこれを最新の L^AT_EX に追隨してまとめ直された `mathfam256` パッケージ^{*10}を使うのが手っ取り早いような気がする.

■無限のレベル

T_EX では、`glue` の伸縮量に `fil`, `fill`, `filll` という 3 つの無限大のレベルが存在し、1 が多いほど無限大のオーダーが高くなっていた. Ω では、「inter-letter spacing のために」`fi` という、有限と `fil` の中間にあたる無限大のレベルが付け加えられた. そこで、この無限大レベル `fi` も採用することにした.

実装方法は、大まかには Ω で `fi` の実装を行っている `change file omfi.ch` の通りであるのだが、これに pT_EX や ε-T_EX に伴う少々の変更を行っている.

- プリミティブ `\pagefistretch`, `\hfi`, `\vfi` を新たに定義している^{*11}.
- `\gluestretchorder`, `\glueshrinkorder` の動作を ε-T_EX のそれと合わせた. 具体的には、ある `glue \someglue` の伸び量を $\langle stretch \rangle$ とおくと、

$$\backslash\gluestretchorder\someglue = \begin{cases} 0 & \langle stretch \rangle \text{ が高々 } \mathit{fi} \text{ レベルの量} \\ 1 & \langle stretch \rangle \text{ がちょうど } \mathit{fil} \text{ レベルの無限量} \\ 2 & \langle stretch \rangle \text{ がちょうど } \mathit{fill} \text{ レベルの無限量} \\ 3 & \langle stretch \rangle \text{ がちょうど } \mathit{filll} \text{ レベルの無限量} \end{cases}$$

となっている. 内部では `fi` レベルが 1, `fil` レベルが 2, ……として処理している^{*12}.

■レジスタについて

Ω では (前にも書いたが) データ構造の変更が行われ、それによってレジスタが各種類あたり 0 番から 65535 番までの 65536 個を使えるようになっている.

一方、ε-T_EX では、256 番以降のレジスタを専用の `sparse tree` に格納することにより、32767 番までのレジスタの使用を可能にしていた. このツリー構造を分析してみると、65536 個までレジスタを拡張するのはさほど難しくないことが分かった. そこで、ε-pT_EX では ε-T_EX 流の方法を用いながらも、ツリーの階層を 1 つ増やして、レジスタ (`count`, `dimen`, `skip`, `muskip`,

^{*10} <https://ctan.org/pkg/mathfam256>.

^{*11} `\hfi`, `\vfi` については [17] に記述があるが、T_EX Live に収録されている N (Ω は T_EX Live に収録されていない) では実装されていない. `\pagefistretch` を実装したのは北川の完全な勘違いである.

^{*12} LuaT_EX にも無限のレベル `fi` が存在するが、`\gluestretchorder`, `\glueshrinkorder` は ε-T_EX や ε-pT_EX と異なり、有限/`fi`/`fil`/`fill`/`filll` で 0/1/2/3/4 である. また、`r52360` で ε-T_EX 互換を意図した `\TeXgluestretchorder`, `\TeXglueshrinkorder` も追加されており、そちらは有限/`fil`/`fill`/`filll` で 0/1/2/3 とし、`fi` は -1 である.

box, token) を Ω と同じように 0 番から 65535 番までの 65536 個を使えるようにした。同様に、マーク (mark) のクラス数も 32768 個から 65536 個まで増やしている。

4 pdfTeX 由来の機能

開発中の L^AT_EX3 では、 ϵ -T_EX 拡張の他に、pdfTeX で導入されたプリミティブ `\pdfstrcmp` (またはその同等品^{*13}) が必要となっており、もはや純粋な ϵ -T_EX ですら L^AT_EX3 を利用することはできない状況である ([5, 6, 7])。その他にも、pdfTeX 由来のいくつかのプリミティブ ([18]) の実装が日本の T_EX ユーザ、および L^AT_EX3 team^{*14} などからあり、ほとんど pdfTeX における実装をそのまま真似する形で実装している。

現在の ϵ -pT_EX で利用できる pdfTeX 由来のプリミティブの一覧を以下に示す。これらは extended mode でないと利用できない。

▶ `\pdfstrcmp` (*general text*) (*general text*)

2 つの引数を文字列化したものを先頭バイトから比較し、結果を -1 (第 1 引数の方が先)、 0 (等しい)、 1 (第 2 引数の方が先) として文字列で返す。

比較する文字列中に和文文字がある場合には、(ϵ -pT_EX の内部漢字コードにかかわらず) UTF-8 で符号化して比較する。そのため、例えば

```
\pdfstrcmp{あ}{\e3\81\83} % 「あ」はUTF-8でE38182
```

の実行結果は -1 である^{*15}。

▶ `\pdfpagewidth`, `\pdfpageheight` (dimension)

ページの「幅」「高さ」を表す内部長さであるが、**ここで言う「幅」は「字送り方向」のことではなく、物理的な意味である。**

この 2 つの内部長さを設定するだけでは dvi に何の影響も与えない。後で述べる `\pdflastxpos`, `\pdflastypos` による出力位置の取得の際の原点位置を設定するためだけに使われ、初期値は 0pt である (pdfTeX の dvi モードと同じ挙動)。ただし、 ϵ -pT_EX では特定書式の `papersize special` を読み取って原点位置を設定する機能を追加している (第 5.6 節を参照)。

▶ `\pdflastxpos`, `\pdflastypos` (read-only integer)

`\pdfsavepos` が置かれた場所の、dvi における出力位置を返す内部整数。原点はページの (物理的な意味の) 左下隅であり、 y 軸は (物理的な) 上方向に向かって増加する。

- ページの物理的な幅と高さはすぐ上の `\pdfpagewidth`, `\pdfpageheight` で設定する。これらの内部長さが 0pt であった場合は、`\shipout` されたボックスの寸法と `\hoffset` (または `\voffset`) の値から自動的に計算される。

^{*13} X_YL_AT_EX では `\stricmp` という名称で、LuaT_EX では Lua を用いて実装されている。

^{*14} 現在ではさらに状況が動き、2021 年以降は、L^AT_EX 2_ε 自体が本節で述べたプリミティブを要求している ([29])。

^{*15} L^AT_EX 2018-04-01 以降では標準で UTF-8 入力となった (`\usepackage[utf8]{inputenc}` が自動で行われていることに相当する) 関係上、本文に述べた入力例を実行する際には `\UseRawInputEncoding` の実行が必要になる。

- p_TE_X では横組・縦組と組方向が複数あるので、`\pdflastxpos`、`\pdflastypos` の値の座標系を「物理的な」向きとすべきか、それとも「組方向に応じた」向きとすべきかは悩みどころである。ε-p_TE_X 110227 以降、現在までのバージョンでは上記のように物理的な向きとしている。
- `\mag` を用いてページの拡大縮小を行い、かつ `dvips` や `dvipdfmx` を用いて PostScript, pdf を生成した場合、`\pdflast{x,y}pos` の原点はページの左下隅から左・上方向にそれぞれ 1 in - 1 truein 移動したところになる^{*16}。

▶ `\pdfcreationdate`

エンジン起動時の時刻を `D:20220405222130+09'00'` の形式で表した文字列に展開される。末尾に `+09'00'` などと表示されるのはローカルのタイムゾーンであるが、例えば `SOURCE_DATE_EPOCH=1000000000` のように環境変数を設定すると `D:20010909014640Z` のようにタイムゾーンは `Z` と表示される。

ε-p_TE_X においてプリミティブを実装した当初は「最初にこのプリミティブが実行された時刻を…」としていたが、ε-p_TE_X 161030 から pdf_TE_X と同じ挙動に修正した。

これは `standalone` パッケージを ε-p_TE_X で扱うために 2013/06/05 に実装されたプリミティブであるが、現在時刻の「秒」まで得るためにも使用できる (T_EX82 では分単位でしか取得できない)。

▶ `\pdffilemoddate <filename>`, `\pdffilesize <filename>`

それぞれ `<filename>` の更新時刻 (`\pdfcreationdate` と同じ形式) とファイルサイズを表す文字列に展開される。これらも `standalone` パッケージのために ε-p_TE_X に実装されたプリミティブである。

▶ `\pdffiledump [offset <offset>] length <length> <filename>`

`<filename>` で与えられたファイル名の `<offset>` バイト目 (先頭は 0) から `<length>` バイトを読み込み、16 進表記 (大文字) した文字列に展開される。

本プリミティブは Heiko Oberdiek 氏による `bmpsize` パッケージを ε-p_TE_X でも使うために角藤さんが実装したものである (2014/05/06)。

▶ `\pdfshellescape` (read-only integer)

`\write18` による shell-escape が利用可能になっているかを示す内部整数。0 ならば不許可、1 ならば許可、2 ならば restricted shell-escape^{*17}である。

本プリミティブは T_EX ユーザの集い 2014 でリクエストを受けて実装された ([9])。

▶ `\pdfmdfivesum [file] <general text>`

`file` が指定された場合は、ファイル名が `<general text>` のファイルの MD5 ハッシュ値に展開される。もしファイルが存在しなかった場合は何も返さない。

`file` が指定されなかった場合は、引数 `<general text>` の MD5 ハッシュ値に展開される。その際、`\pdfstrcmp` と同じように和文文字は UTF-8 で符号化してから計算される。

^{*16} これは pdf_TE_X の dvi モードや X_T_TE_X と同じ挙動である。

^{*17} あらかじめ「安全」と認められたプログラム (`texmf.cnf` 中で指定する) のみ実行を許可する仕組み。

例えば

```
\pdfmdfivesum{あ}
\pdfmdfivesum{^^e3^^81^^82}
```

の結果はいずれも 8C0C3027E3CFC3D644CAAB3847A505B0 である。

このプリミティブは [11] 以降の議論を元に、角藤さんがリクエストしたもので、2015/07/04 に ε -pTeX に実装されている。

▶ `\pdfprimitive` *<control sequence>*, `\ifpdfprimitive` *<control sequence>*

`\pdfprimitive` は次に続く制御綴がプリミティブと同じ名称であった場合に、プリミティブ本来の意味で実行させるものである。例えば

```
\pdfprimitive\par
```

は、`\par` が再定義されていようが、本来の `\par` の意味（段落終了）となる。また、`\ifpdfprimitive` は、次に続く制御綴が同名のプリミティブの意味を持っていれば真、そうでなければ偽となる条件判断文である。

これらのプリミティブは 2015/07/15 版の `expl3` パッケージで使われた ([12]) ことを受けて実装されたものである。

▶ `\pdfuniformdeviate` *<number>*, `\pdfnormaldeviate`

`\pdfuniformdeviate` は、0 以上 *<number>* 未満の一様分布に従う乱数^{*18}（整数値）を生成し、それを 10 進表記した文字列に展開される。`\pdfnormaldeviate` は、平均値 0、標準偏差 65536 の正規分布に従う乱数（整数値）を生成し、それを 10 進表記した文字列に展開される。

▶ `\pdfrandomseed` (read-only integer), `\pdfsetrandomseed` *<number>*

乱数生成の種の値は、内部整数 `\pdfrandomseed` で取得できる。種の初期化にはシステムのマイクロ秒単位での現在時刻情報が使われる。また、種の値を設定するには `\pdfsetrandomseed` に引数として渡せば良い。

L^AT_EX3 の `l3fp` において、2016/11/12 あたりから実装された乱数生成機能 ([13]) をサポートするために ε -pTeX 161114 から実装された。

▶ `\pdfelapsedtime` (read-only integer), `\pdfresettimer`

`\pdfelapsedtime` は、エンジン起動からの経過時間を “scaled seconds” すなわち 1/65536 秒単位で返す。この値は `\pdfresettimer` によって再び 0 にリセットできる。すぐ上の乱数生成プリミティブと同時に実装された。

▶ `\expanded` *<general text>*

(`\message` が行うのと同様に) *<general text>* を完全展開した結果のトークン列を返す。

^{*18} 乱数とはいっても、例えば `\pdfuniformdeviate 536870912` は常に偶数を生成することが知られている ([14])。しかしもともとの pdfTeX の実装がそうっており、他のエンジンでも直されていないため ε -pTeX でもこの症状には独自対処はしない。

この命令は元々は pdfTeX に実装計画があったそうである ([23]) が、しばらくの間 LuaTeX にのみ実装されていた命令であった。しかし [22] をきっかけに、pdfTeX, ε-pTeX, XqTeX で一斉に実装された。ε-pTeX 180518 以降で利用可能である。

▶ `\ifincsname`

`\csname ... \endcsname` 内で評価されたちょうどその時に真となる。L^ATeX 2019-10-01 で行われる変更 ([24, 26]) で必要になったために ε-pTeX 190709 で導入された。

▶ `\vadjust pre` (*vertical mode material*)

`\vadjust` 自体は TeX82 に存在し、それが現れた行の**直後**に (*vertical mode material*) を配置するものである。pdfTeX では、`\vadjust` にキーワード `pre` を付けると、それが現れた行の**直前**に (*vertical mode material*) を配置できるように拡張されており、同じ機能が LuaTeX と XqTeX にも存在するので、ε-pTeX 210701 でこれをサポートした。

発端は、2021 年 2 月に Pandoc で「ハイパーリンクのターゲットを行の下端ではなく上端にする」という目的で `\vadjustpre` が使われたことである [30]。

5 ε-pTeX の追加プリミティブ

5.1 バージョン番号

pTeX p3.8.0 に `\ptexversion` が実装されたのと同時に、ε-pTeX でもバージョン番号を取得する `\epTeXversion` プリミティブが ε-pTeX 180121 から追加された。

▶ `\epTeXversion` (read-only integer)

ε-pTeX のバージョン番号 (例えば 220214) を内部整数で返す。ε-pTeX 起動時のバナーでは ε-TeX, pTeX のバージョン番号も表示されるので、それを再現しようとする以下のようなになる。

```
This is e-pTeX, Version 3.14159265-%
p\number\ptexversion.\number\ptexminorversion\ptexrevision-%
\number\epTeXversion-\number\eTeXversion\eTeXrevision ...
```

5.2 `\lastnodechar` プリミティブ

本プリミティブは TeX ユーザの集い 2014 でリクエストを受けて実装された ([9]) プリミティブで、ε-pTeX 141119 以降の extended mode で利用可能である。詳細な背景説明・仕様は [10] に譲る。

pTeX では

これは、`\textmc{『ほげ党宣言』}`の……

という入力からは

これは、『ほげ党宣言』の……

という出力が得られ、コンマと二重鍵括弧の間が全角空きになってしまうことが以前から知られている。

この現象は、(展開し続けた結果)「,」の直後のトークンが「『」ではないことによって、「,」の後の半角空きと、「『」の前の半角空きが両方入ってしまうという pTeX の和文処理の仕様^{*19}による。min10 フォントメトリックで「ちょっと」を組むと「よっ」の間が詰まるという不具合は有名であるが、「ちょ{ }つと」と空グループを挟むことで回避されるのも、同じ理由である。

`\lastnodechar` プリミティブは、上で述べた「書体変更命令を間に挟むと和文間グルーが『まともに』ならない」という状況を改善する助けになることを目指して実装された。

▶ `\lastnodechar` (read-only integer)

現在構築中のリストの「最後のノード」が文字由来であれば、そのコード番号(内部コード)を内部整数として返す。リストが空の場合、また「最後のノード」が文字を表すものでなかった場合は、`-1` が返る。

上記「最後のノード」では、pTeX によって自動挿入される

- メトリック由来の空白 (JFM グルー、カーン)
- 行末禁則処理のために挿入されるペナルティ
- 欧文文字のベースライン補正用のノード

は無視される。また、現在の実装では「最後のノード」が欧文文字のリガチャであった場合は、リガチャそれ自身のコード番号ではなく、最後の構成要素の文字のコード番号を返すようにしている。

例えば、`\lastnodechar` を使って

これは、`\the\lastnodechar\textmc{『ほげ党宣言』}`……

と入力すると、

これは、41380 『ほげ党宣言』……

のようになり、`\lastnodechar` 実行時の「最後のノード」(文字「,」を表す)の内部コード^{*20}が得られる。これによって、`\textmc` 等の命令の直前の文字を知ることができるので、あとは TeX マクロ側でなんとかできるだろう、という目論見である。

また、上記の説明にあるとおり、

```
abcfi\the\lastnodechar, abc\char"1C \the\lastnodechar
```


は

^{*19} TeX82 の欧文のカーニングや合字処理も同じような仕様になっている。例えば `\relax oWo` からは `WoWo` という出力になり、`W` と `o` の間のカーニングが `\relax` によって挿入されなくなったことがわかる。

^{*20} 内部コードが EUC の場合は `"A1A4 = 41380`、SJIS の場合は `"8143 = 33091` となる。

abcfi105, abcfi28

となり、見た目では同じ「fi」が `\lastnodechar` 実行時の「最後のノード」であるかのように見えても、それが合字の場合（左側）では `\lastnodechar` の実行結果は最後の構成要素「i」のコード番号 105 となる。

 「これは、」とソース中に入力したときのノードの状態を `\showlists` で調べてみると次のようになり、本当に一番最後のノードは JFM によって挿入される二分空きの空白（「,」と通常の和文文字の間に入るはずのもの）であることがわかる。

```
### yoko direction, horizontal mode entered at line 465
\hbox(0.0+0.0)x9.24683
\JY1/hmc/m/it/10 こ
\JY1/hmc/m/it/10 れ
\JY1/hmc/m/it/10 は
\penalty 10000(for kinsoku)
\JY1/hmc/m/it/10 ,
\glue(refer from jfm) 4.62341 minus 4.62341
```

しかし、数段落上の説明の通り、`\lastnodechar` は pTeX の和文処理によって自動的に挿入されたこれら JFM 由来の空白を無視する。

「最後のノード」を見ているので、

```
これは、\relax\sffamily{\the\lastnodechar\textmc{『ほげ党宣言』}}……
```

のようにノードを作らない `\relax, {}`、`\sffamily` などが途中にあっても、それらは単純に無視されて

```
これは、41380『ほげ党宣言』……
```

と「,」の内部コードが取得される。

5.3 `\lastnodefont` プリミティブ

`\lastnodechar` を補完するものとして、 ϵ -pTeX 220214 (TeX Live 2022) で実装された。

▶ `\lastnodefont` (read-only font identifier)

現在構築中のリストの「最後のノード」が文字由来であれば、そのフォント（内部識別子）を返す。リストが空の場合、また「最後のノード」が文字を表すものでなかった場合は、`\nullfont` が返る。

ここでも「最後のノード」は `\lastnodechar` と同様で

- メトリック由来の空白（JFM グルー、カーン）
- 行末禁則処理のために挿入されるペナルティ
- 欧文文字のベースライン補正用のノード

は無視される。

TeX Live 2020 の pTeX (p3.8.3) で追加された `\ifjfont`, `\iftfont` と組み合わせれば、「最後のノード」が和文文字かどうかを判別できる^{*21}。

5.4 `\lastnodesubtype` プリミティブ

[20, 21] などの議論で、「最後のグルーが JFM グルーの場合のみ `\unskip` する」処理の必要性が唱えられてきた。ε-TeX にはもともと最後のノードの種別を返す `\lastnodetype` プリミティブがあったが、これでは最後のノードがグルーであるかしかわからない。そのため、ε-pTeX 180226 で `\lastnodetype` を補完するものとして、`\lastnodesubtype` プリミティブを追加した。

▶ `\lastnodesubtype` (read-only integer)

現在構築中のリストの最後のノードの `subtype` 値を内部整数として返す。ここでの最後のノードは `\lastnodetype` と同様である。すなわち、`\lastnodechar` や `\lastnodefont` とは

- メトリック由来の空白 (JFM グルー, カーン)
 - 行末禁則処理のために挿入されるペナルティ
- も対象とするという点で異なる。
- 最後のノードが文字ノードのときは 0 が返る。
 - 現在構築中のリストが空のときは -1 が返る。
 - ε-pTeX 210701 以降では、数式内のノードについては `subtype` 値そのままではほとんど意味がないので、次ページの表の値を返す。

実際に有用なのは、以下の場合であろう：

最後のノードがグルー (`\lastnodetype = 11`) のとき

0: 明示的な <code>\hskip</code> , <code>\vskip</code>	9: <code>\rightskip</code>	18: <code>\thinmuskip</code>
1: <code>\lineskip</code>	10: <code>\topskip</code>	19: <code>\medmuskip</code>
2: <code>\baselineskip</code>	11: <code>\splittopskip</code>	20: <code>\thickmuskip</code>
3: <code>\parskip</code>	12: <code>\tabskip</code>	21: JFM 由来グルー
4: <code>\abovedisplayskip</code>	13: <code>\spaceskip</code>	98: <code>\nonscript</code>
5: <code>\belowdisplayskip</code>	14: <code>\xspaceskip</code>	99: <code>\mskip</code>
6: <code>\abovedisplayshortskip</code>	15: <code>\parfillskip</code>	100: <code>\leaders</code>
7: <code>\belowdisplayshortskip</code>	16: <code>\kanjiskip</code>	101: <code>\cleaders</code>
8: <code>\leftskip</code>	17: <code>\xkanjiskip</code>	102: <code>\xleaders</code>

最後のノードがカーン (`\lastnodetype = 12`) のとき

0: カーニング	2: アクセント由来	99: <code>\mkern</code>
1: 明示的な <code>\kern</code>	3: イタリック補正 <code>\/</code>	

最後のノードがペナルティ (`\lastnodetype = 13`) のとき

0: 明示的な <code>\penalty</code>	2: 禁則処理由来
-------------------------------	-----------

^{*21} ε-pTeX では「`\lastnodechar` が 256 以上かどうか」でも判別できるが、ε-upTeX では文字コード 0-255 の和文文字ノードも存在しうることに注意。

1: `\jcharwidowpenalty`

しかし、本プリミティブは ϵ -pTeX 内部で使用している `subtype` の値をそのまま返すだけであるので、具体的な数値は将来変わる恐れがある。そのため、

```
\ifnum\jis"2121="3000 %% upTeX check
  \jfont\tenmin=upjisr-h at 9.62216pt
\else
  \jfont\tenmin=min10
\fi
\tenmin\char\jis"214B\null\setbox0\lastbox%"
\global\chardef\pltx@gluetype\lastnodetype
\global\chardef\pltx@jfmgluesubtype\lastnodesubtype
```

のように TeX ソース内から取得・保存しておくことが望ましい。

なお pLaTeX 2018-04-01 以降では、上記のコードを利用して「最後のグルーが JFM グルーのときだけ消す」命令 `\removejfmglue` を

```
\protected\def\removejfmglue{%
  \ifnum\lastnodetype=\pltx@gluetype\relax
    \ifnum\lastnodesubtype=\pltx@jfmgluesubtype\relax
      \unskip
    \fi\fi}
```

として定義している。

■ ϵ -pTeX 210701 以降の注意

上でも述べたように、数式内のノードについては `subtype` 値はほとんど意味を持たないので、これらに対する `\lastnodesubtype` では `subtype` 値でなく以下の値を返すようにした：

最後のノードが数式内のノード (`\lastnodetype = 15`)

0: 明示的なスタイル指定 ^{*22}	7: <code>\mathrel</code>	15: <code>\overline</code>
1: <code>\mathchoice</code>	8: <code>\mathopen</code>	16: <code>\mathaccent</code>
2: <code>\mathord</code>	9: <code>\mathclose</code>	17: <code>\vcenter</code>
3: <code>\mathop + \displaylimits</code>	10: <code>\mathpunct</code>	18: <code>\left</code>
4: <code>\mathop + \limits</code>	11: <code>\mathinner</code>	19: <code>\middle</code>
5: <code>\mathop + \nolimits</code>	12: <code>\radical</code>	
6: <code>\mathbin</code>	14: <code>\underline</code>	

なお、`\left...[\middle]...\right` の直後で `\lastnodesubtype` を使用しても、`\left...[\middle]...\right` 全体が一つの内部数式 (`\mathinner`) となるので、`\right` に「対応する」`\lastnodesubtype` の値は取得できない。`\over` プリミティブなどによる分数についても類似の事情がある。

^{*22} `\displaystyle`, `\textstyle`, `\scriptstyle`, `\scriptscriptstyle`.

5.5 `\epTeXinputencoding` プリミティブ

現在読み込んでいるファイルの文字コードを切り替えるプリミティブであり、2016/02/01に阿部紀行さんによって実装された。詳細は実装者の解説記事 [15] を参照してほしいが、おおまかに述べると以下のようなになるだろう。

▶ `\epTeXinputencoding` $\langle encoding \rangle$

現在読み込んでいるファイルの文字コードを $\langle encoding \rangle$ に変更する。実際に変更されるのは「次の行」であり、また現在のファイルからさらに `\input` 等で読まれたファイルには効力を及ぼさない。

引数 $\langle encoding \rangle$ の読み取りは、(L)T_EX で定義が上書きされていない、プリミティブの `\input` の引数 (ファイル名) を取得するのと同じルーチンが用いられる。そのため、


```
\epTeXinputencoding sjis
```

のように、 $\langle encoding \rangle$ は `{}` で囲まないこと^{*23}。 $\langle encoding \rangle$ の末尾は、空白トークンや展開不能トークンによって区切られる。

$\langle encoding \rangle$ の値は、基本的には pT_EX の `-kanji` オプションで指定できる値 (`eu`, `sjis`, `jis`, `utf8`) である。大文字小文字は考慮しない (T_EX の `\uccode`, `\lccode` は参照しない)。

5.6 用紙の原点位置の設定、`\readpapersizespecial` プリミティブ

pT_EX 系列では、用紙サイズの指定には伝統的に `papersize special` が利用されてきた。それを考慮して、 ϵ -pT_EX では「特定書式の `papersize special` を読み取って `\pdflastxpos`, `\pdflastypos` (第 4 節を参照) の原点位置を設定する」という機能を付加している。

 dviware によって正確な書式は異なるようだが、 ϵ -pT_EX 180901 が解釈する `papersize special` は以下の文法に沿ったものになっている^{*24}。なお、`jsclasses` の `papersize` オプションや 2016 年以降の `graphics/color` パッケージのドライバオプションが発行する書式は、これに合致する。

```
 $\langle special \rangle \rightarrow \text{papersize}=(\text{length}),(\text{length})$   
 $\langle length \rangle \rightarrow \langle decimal \rangle(\text{optional true})(\text{physical unit})$   
 $\langle decimal \rangle \rightarrow . | \langle digit \rangle \langle decimal \rangle | \langle decimal \rangle \langle digit \rangle$ 
```

負の符号や小数点としての「,」, そして一切の空白を許容しないところに注目してほしい。また、`zw`, `zh`, `em`, `ex` という現在のフォントに依存する単位も使用不可能である。

また、 ϵ -pT_EX 180901 以降では `\readpapersizespecial` プリミティブによって本機能の有効・無効を制御できる。それより前のバージョンでは、本機能は常に有効であった。

^{*23} T_EX Live 2020 以降、`\input` プリミティブでブレースで囲まれたファイル名指定が可能になった (r53729) ことに付随して、`\epTeXinputencoding` でもブレースで囲んだ $\langle encoding \rangle$ の指定が可能となった。

^{*24} `papersize special` で指定した長さは常に `true` 付きで解釈するのが慣習となっているが、 ϵ -pT_EX 180901 より前では `true` なしの寸法として解釈するというバグが存在した。

▶ `\readpapersizespecial` (integer)

この内部整数の値が正の場合、 ϵ -pTeX は `papersize special` が dvi 中に書き出される時にその内容を解釈し、自動的に `\pdfpagewidth`, `\pdfpageheight` の値を設定する。 ϵ -pTeX 180901 で追加され、既定値は 1 である。

5.7 `\current[x]spacingmode` プリミティブ

もともと pTeX 系列では、`\kanjiskip`, `\xkanjiskip` の挿入が有効になっているか直接的に知る方法が `\showmode` プリミティブしかなかった。これでは使い勝手が悪いので、`\currentspacingmode`, `\currentxspacingmode` プリミティブが 2019/10/28 に山下さんによって実装された ([27])。

▶ `\currentspacingmode` (read-only integer)

pTeX の「標準で `\kanjiskip` を挿入する」機能が有効 (`\autospaceing`) ならば 1, 無効 (`\noautospaceing`) ならば 0 を返す。

▶ `\currentxspacingmode` (read-only integer)

pTeX の「標準で `\xkanjiskip` を挿入する」機能が有効 (`\autoxspaceing`) ならば 1, 無効 (`\noautoxspaceing`) ならば 0 を返す。

同様に、 ϵ -upTeX でも `\currentcjktoken` プリミティブが 2019/10/28 に実装された。

▶ `\currentcjktoken` (read-only integer, ϵ -upTeX のみ)

upTeX の「和文 (CJK) 文字と欧文文字を区別する」機能について、`\enablecjktoken` の状態ならば 0, `\disablecjktoken` の状態ならば 1, `\forcecjktoken` の状態ならば 2 を返す。

6 Unicode TeX 由来の機能

6.1 `\Uchar`, `\Ucharcat` プリミティブ

X_qTeX, LuaTeX には、文字コード $\langle character\ code \rangle$ を引数にとり**文字トークン**に展開される「`\Uchar` $\langle character\ code \rangle$ 」というプリミティブが存在する*²⁵。また X_qTeX には、文字コード・カテゴリコードがそれぞれ $\langle character\ code \rangle$, $\langle category\ code \rangle$ である文字トークンを作る「`\Ucharcat` $\langle character\ code \rangle$ $\langle category\ code \rangle$ 」というプリミティブも存在する*²⁶。

pTeX で「和文版 `\Uchar`」に相当することは TeX Live 2019 以前の pTeX ではマクロで実現することが可能だが、将来の pTeX の改修で不可能になる恐れ ([25, 28]) があるので、 ϵ -pTeX 191112 で前段落で述べた `\Uchar`, `\Ucharcat` プリミティブを追加することにした。

*²⁵ `\char` は展開不能プリミティブであることに注意。

*²⁶ LuaTeX では Lua による代替物がある。

▶ `\Uchar` $\langle character\ code \rangle$

文字コードが $\langle character\ code \rangle$ の文字トークンに展開される。指定した値と得られる文字トークンの対応表は次の通り。

$\langle character\ code \rangle$	和文・欧文	category code	
		ε -p \TeX	ε -up \TeX
0-31, 33-255	欧文文字トークン	12	12
32	欧文文字トークン	10	10
256 以上の $\langle kanji\ code \rangle$	和文文字トークン	— (都度取得)	その時の <code>\kcatcode</code> ^{*27}

▶ `\Ucharcat` $\langle character\ code \rangle$ $\langle category\ code \rangle$

文字コード・カテゴリーコードがそれぞれ $\langle character\ code \rangle$, $\langle category\ code \rangle$ の文字トークンに展開される。

ε -p \TeX では和文文字トークンにはカテゴリーコードの情報は保存されないため、 ε -p \TeX の `\Ucharcat` は欧文文字トークンの生成しかサポートしない。具体的には、指定可能な値は $\langle character\ code \rangle$ が 0-255, $\langle category\ code \rangle$ が 1-4, 6-8, 10-13 のみである。



ε -up \TeX では、`\Ucharcat` で和文文字トークンの生成もサポートしている。

- $\langle character\ code \rangle$ が 0-127 のときは、欧文文字トークンのみ生成可能である。従って $\langle category\ code \rangle$ の指定可能値は 1-4, 6-8, 10-13。
- $\langle character\ code \rangle$ が 128-255 のときは、欧文文字トークン・和文文字トークンのどちらも生成可能である。 $\langle category\ code \rangle$ の指定可能値は 1-4, 6-8, 10-13 (以上欧文文字トークンを生成)、および 16-19 (和文文字トークンを生成)。
- $\langle character\ code \rangle$ が 256 以上のときは、和文文字トークンのみ生成可能である。従って $\langle category\ code \rangle$ の指定可能値は 16-19。



`\Uchar` で和文文字トークンを生成するには、その和文文字コードを与える必要があるが、その値は内部漢字コードに依るので、`\jis` や `\euc` 等の文字コード変換プリミティブを使うのが便利である (例えば `\Uchar\jis"3441` で「漢」を得る)。

ただし、 ε -up \TeX の `\Ucharcat` では $\langle character\ code \rangle$ と $\langle category\ code \rangle$ を空白トークンで区切る必要があり、注意を要する。例えば、カテゴリーコード 17 の「漢」を得ようとして、単に

```
\Ucharcat\jis"3441 17 % エラー
```

と書くとエラー^{*28}が発生する。次のように書けばエラーが回避できるようである。

```
\Ucharcat\jis"3441\noexpand\space17 % エラー回避
```

あるいは：

```
\Ucharcat\numexpr\jis"3441\relax 17 % エラー回避
```

^{*27} もし `\kcatcode` の値が 15 だったときは、得られる和文文字トークンの `\kcatcode` は 18 となる。

^{*28} `\jis` の展開時に後ろの空白トークンが食われてしまい、`\Uchar` には文字コード 2845017 (漢 = U+6F22 → 28450 と 17 が繋がった結果) が渡ってしまう。

6.2 エラー抑制 (`\suppress...error`)

LuaTeX に実装されているエラー発生を抑止するプリミティブたちのうちいくつかを、 ϵ -pTeX 211207 で追加した。

- ▶ `\suppresslongerror` (integer)
この内部整数が非ゼロのとき、`\long` なしで定義されたマクロの引数に `\par` が入った場合の `! Paragraph ended before \... was complete.` というエラーを抑止する。
- ▶ `\suppressoutererror` (integer)
この内部整数が非ゼロのとき、`\outer` 由来のエラーを抑止する。
- ▶ `\suppressmathparerror` (integer)
この内部整数が非ゼロのとき、数式モード中の `\par` に由来するエラーを抑止する。

7 TeX Live による拡張

2021 年以降の ϵ -pTeX/ ϵ -upTeX には、TeX Live チームによって pdfTeX 及び XeTeX と共通のクロスエンジンな拡張機能がいくつか追加されている。

7.1 デバッグ機能 (`\tracing...`)

- ▶ `\tracinglostchars` (integer)
現在のフォント (TFM) に存在しない文字にアクセスしたときのトレース情報をどのように表示するかを決定する内部整数である。TeX82 は、値が正 (1 以上) の場合に

```
Missing character: There is no 文字 in font フォント名!
```

のメッセージをログファイルに出力する。また ϵ -TeX は、値が 2 以上の場合に同じメッセージを `\tracingonline` の値にかかわらずターミナルにも出力する。
TeX Live 2021 以降ではさらに、値が 3 以上の場合にエラーを発生させ、当該文字コードを 16 進数で表示するように拡張されている。例えば以下のとおり：

```
! Missing character: There is no 文字 ("XX) in font フォント名.
```

なお、pTeX 系列では「全ての和文フォントには、和文文字コードとして有効な全ての文字が存在する」という扱いであるため、和文文字コードについてこのトレース情報が出力されることはない。

- ▶ `\tracingstacklevels` (integer)
`\tracingstacklevels` の値が正、かつ `\tracingmacros` の値も正の場合、マクロ展開の深さを示す prefix を出力する。例えば、深さ 2 のときは `~..` が表示される。なお、指定された数値以上の深さについてはマクロ展開のトレースを切り捨てる。TeX Live 2021

で追加された。

7.2 par トークンの制御

TeX82 では `\par` という名称の制御綴は特別な役割を持っている。

- 以下の場合には自動的に `\par` が挿入される：
 - 入力中の空行（2行連続で空行があった場合は2回 `\par` が発行される）
 - 水平モード中で TeX が垂直モード用の命令 (`\vskip`, `\hrule`, `\unvbox`, `\unvcopy`, `\halign`, `\end`, `\dump`) に出くわしたとき、その直前^{*29}
- `\long` なしで定義されたマクロ中の引数には `\par` は使用できない。

```
! Paragraph ended before \... was complete.
```

というエラーが発生する。なお、禁止されるのは `\par` という**名称**の制御綴であって、`\let\endgraf\par` などのように別の名称の制御綴に `\par` の意味をコピーして用いるのは問題ない。

L^ATeX 2_ε 2021-06-01 などでは「段落終了時のフック」を実現させるために `\par` の自動挿入という挙動を利用しており、`\par` を再定義している。

しかし、TeX82 には「`\par` という名称の制御綴」ではなく「暗黙の `par`」を挿入する箇所が存在する。その代表が「`\vbox` の中身が水平モードで終わった場合」であり、この場合は `\par` という名称の制御綴を再定義しても使われない。すなわち、L^ATeX 2_ε などの「段落終了時のフック」が抜けてしまうことになる。

2021-07-25 のコミット r60054 (TeX Live では 2022 年以降) では、`\partokenname` と `\partokencontext` というプリミティブが追加された。

▶ `\partokenname` *<control sequence>*

上で述べた `\par` という名称の制御綴の特別な役割を、他の制御綴に移す効果を持つ。

```
\partokenname \hoge
```

を実行した際に起こる状況で説明すると、

- 上記で述べた「自動挿入される命令」が `\par` から `\hoge` に変わる。
- `\long` なしで定義された制御綴の引数において、`\par` は許容されるようになるが逆に `\hoge` が許容されなくなる。

なお、`\partokenname` の効果は常にグローバルである。

▶ `\partokencontext` (integer)

TeX が `\par`^{*30} を自動挿入する箇所を制御する内部整数であり、既定値は 0 である。

自動挿入箇所は次の通り：

^{*29} オリジナルの状態では `\par` は段落終了（垂直モードへ移行）の意味を持つが、`\par` が再定義されて垂直モードへの移行に失敗すると無限ループが発生する。

^{*30} あるいは `\partokenname` により代わりに別の制御綴になっているかもしれない。

いつでも挿入 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}82$ での自動挿入箇所 (上述)

`\partokencontext > 0` のときのみ挿入 `\vbox`, `\vtop`, `\vcenter` それぞれの末尾

`\partokencontext > 1` のときのみ挿入 `\insert`, `\vadjust`, `\valign` での各セル,

`\noalign` のそれぞれの末尾と, `output routine` の末尾

なお, 実際の挿入はそれぞれの箇所が水平モードであった場合にのみ行われる.

`\partokencontext` の既定値は 0 であり, この場合の挙動は $\text{T}_{\text{E}}\text{X}82$ と互換である. 値を 1 にすれば, 「`\vbox` の中身が水平モードで終わった場合」にも「暗黙の `par`」ではなく「`\par` という名称の制御綴」が挿入されるので, `\par` の再定義が効く.

7.3 `\show` 系コマンドの出力制御

▶ `\showstream` (integer)

通常, `\show` 系コマンド^{*31}はエラー発生と同様に一旦停止し, 種々の情報をターミナルやログファイルに出力する. しかし, 内部整数 `\showstream` の値をオープンな出力ストリーム (`\openout` でオープンされる) に一致させると, 種々の情報の出力先がリダイレクトされ, ターミナルやログファイルには出力せず一旦停止もしない. 既定値は `-1` であり, これはファイルと一致しないため $\text{T}_{\text{E}}\text{X}82$ と同じ動作となる. 2021-11-07 のコミット r60992 ($\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Live では 2022 年以降) で追加された.

参考文献

- [1] 北川 弘典, 「計算数学 II 作業記録」, 2008.
<https://osdn.jp/projects/eptex/document/resume/ja/1/resume.pdf> ほか, 本 pdf と同じディレクトリにある `eptex_resume.pdf` がそれにあたる.
- [2] 山本 和義, 「数式 fam の制限と `luatex`」, 掲示板「 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Q & A」, 2009/02/12.
<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfaq/qa/52744.html>
- [3] 山本 和義, 「Re: 数式 fam の制限と `luatex`」, 掲示板「 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Q & A」, 2009/02/16.
<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfaq/qa/52767.html>
- [4] 山本 和義, 「数式 fam 拡張マクロ for `e-pTeX` 等」, 掲示板「 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Q & A」, 2009/02/21.
<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfaq/qa/52799.html>
- [5] 河原, 「パッケージとディストリビューションについて」, 掲示板「 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Q & A」, 2010/12/16. <http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfaq/qa/55464.html>
- [6] 角藤 亮, 「Re: パッケージとディストリビューションについて」, 掲示板「 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ Q & A」, 2010/12/19. <http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfaq/qa/55478.html>
- [7] zrbabbler, 「`LaTeX3` と `expl3` パッケージ」, ブログ「マクロツイーター」内, 2010/12/22.
<http://d.hatena.ne.jp/zrbabbler/20101222/1293050561>

^{*31} 具体的には $\text{T}_{\text{E}}\text{X}82$ の `\show`, `\showbox`, `\showlists`, `\showthe` と $\epsilon\text{-T}_{\text{E}}\text{X}$ の `\showgroups`, `\showifs`, `\showtokens` が該当. さらに $p\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 系列では `\showmode` も加わる.

- [8] 角藤 亮, 「Re: e-pTeX 101231」, 掲示板「T_EX Q & A」, 2011/01/01.
<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/~okumura/texfaq/qa/55528.html>
- [9] Dora TeX, 「Re: \pdfshellescape, \lastnodechar の実装」, T_EX Forum, 2014/11/19.
<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/tex/mod/forum/discuss.php?d=1435#p8053>
- [10] 北川 弘典, 「\lastnodechar プリミティブについて」, 2014/12/15.
<https://ja.osdn.net/projects/eptex/wiki/lastnodechar>
- [11] Joseph Wright, “[XeTeX] \(\pdf)mdfivesum”, 2015/07/01,
<http://tug.org/pipermail/xetex/2015-July/026044.html>
- [12] tat tsan, 「[expl3 / e(u)ptex] 2015/07/15 版 expl3 パッケージが、(u)platex で通らない」, T_EX Forum, 2015/07/26.
<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/tex/mod/forum/discuss.php?d=1632>
- [13] Joseph Wright, “[tex-live] Random number primitives”, 2016/11/12,
<http://tug.org/pipermail/tex-live/2016-November/039436.html>
- [14] Bruno Le Floch, “[XeTeX] Random number primitives”, 2016/12/06,
<http://tug.org/pipermail/pipermail/xetex/2016-December/026920.html>
- [15] 阿部 紀行, 「2016 年 2 月 2 日」, 2016/02/02.
<http://abenori.blogspot.jp/2016/02/e-ptexinputencoding.html>.
- [16] The $\mathcal{N}\mathcal{S}$ Team. *The ε -T_EX manual* (v2.0).
 $\$TEXMFDIST/doc/etex/base/etex_man.pdf$
- [17] J. Plaice, Y. Haralambous. *Draft documentation for the Ω system*, 1999.
 $\$TEXMFDIST/doc/omega/base/doc-1.8.tex$
- [18] Hàn Thê Thành et al. *The pdfT_EX user manual*, 2015.
 $\$TEXMFDIST/doc/pdftex/manual/pdftex-a.pdf$
- [19] The L^AT_EX3 Project Team, *L^AT_EX News Issue 26*, 2017.
 $\$TEXMFDIST/source/latex/base/ltnews26.tex$,
<https://www.latex-project.org/news/latex2e-news/ltnews26.pdf>.
- [20] 北川 弘典, 「[ptex] \inhibitglue の効力」, 2017/09/20.
<https://github.com/texjporg/tex-jp-build/issues/28>.
- [21] Dora TeX, 「p 指定の tabular でのセル冒頭の \relax\par」, 2018/02/19.
<https://github.com/texjporg/platex/issues/63>.
- [22] Joseph Wright, “[tex-live] Primitive parity, \expanded and \Ucharcat”, 2018/05/04,
<http://tug.org/pipermail/tex-live/2018-May/041599.html>
- [23] Joseph Wright, “A ‘new’ primitive: \expanded”, 2018/12/06.
<https://www.texdev.net/2018/12/06/a-new-primitive-expanded>
- [24] Volker-Weissmann, “Feature Request: Better error messages for non-ASCII symbols in labels.”, 2018/12/03.
<https://github.com/latex3/latex2e/issues/95>
- [25] 北川 弘典, 「バイト列と和文文字トークンの区別」, 2019/06/08.
<https://github.com/texjporg/tex-jp-build/issues/81>.
- [26] aminophen, 「[e-pTeX] \ifincsname」, 2019/07/09.

- <https://github.com/texjporg/tex-jp-build/issues/83>.
- [27] aminophen, 「e(u)ptex: add `\current(x)spacingmode`, `\currentcjktoken`」, 2019/10/28.
<https://github.com/texjporg/tex-jp-build/pull/94>.
- [28] 北川 弘典, 「[eptex] `\Uchar` and `\Ucharcat`」, 2019/10/30.
<https://github.com/texjporg/tex-jp-build/issues/95>.
- [29] The L^AT_EX3 Project Team, *L^AT_EX News Issue 31*, 2020.
`$TEXMFDIST/source/latex/base/ltnews31.tex`,
<https://www.latex-project.org/news/latex2e-news/ltnews31.pdf>.
- [30] aminophen, 「e(u)ptex: Add `\vadjustLpre`」, 2021/05/22.
<https://github.com/texjporg/tex-jp-build/pull/115>

索引

Symbols	
<code>\currentcjktoken</code>	18
<code>\currentifttype</code>	5
<code>\currentspacingmode</code>	18
<code>\currentxspacingmode</code>	18
<code>\epTeXinputencoding</code>	17
<code>\epTeXversion</code>	12
<code>\expanded</code>	11
<code>\fontchardp</code>	5
<code>\fontcharht</code>	5
<code>\fontcharic</code>	5
<code>\fontcharwd</code>	5
<code>\glueshrinkorder</code>	8
<code>\gluestretchorder</code>	8
<code>\hfi</code>	8
<code>\iffontchar</code>	6
<code>\ifincsname</code>	12
<code>\ifpdfprimitive</code>	11
<code>\lastnodechar</code>	13
<code>\lastnodefont</code>	14
<code>\lastnodesubtype</code>	15
<code>\lastnodetype</code>	5
<code>\middle</code>	4
<code>\odelcode</code>	7
<code>\odelimiter</code>	7
<code>\omathaccent</code>	7
<code>\omathchar</code>	7
<code>\omathchardef</code>	7
<code>\omathcode</code>	7
<code>\oradical</code>	7
<code>\pagefistretch</code>	8
<code>\partokencontext</code>	21
<code>\partokenname</code>	21
<code>\pdfcreationdate</code>	10
<code>\pdfelapsedtime</code>	11
<code>\pdffiledump</code>	10
<code>\pdffilemoddate</code>	10
<code>\pdffilesize</code>	10
<code>\pdflastxpos</code>	9
<code>\pdflastypos</code>	9
<code>\pdfmdfivesum</code>	10
<code>\pdfnormaldeviate</code>	11
<code>\pdfpageheight</code>	9
<code>\pdfpagewidth</code>	9
<code>\pdfprimitiv</code>	11
<code>\pdfrandomseed</code>	11
<code>\pdfresettimer</code>	11
<code>\pdfsavepos</code>	9
<code>\pdfsetrandomseed</code>	11
<code>\pdfshellescape</code>	10
<code>\pdfstrcmp</code>	9
<code>\pdfuniformdeviate</code>	11
<code>\readpapersizespecial</code>	18
<code>\showstream</code>	22
<code>\suppresslongerror</code>	20
<code>\suppressmathparerror</code>	20
<code>\suppressoutererror</code>	20
<code>\tracinglostchars</code>	20
<code>\tracingstacklevels</code>	20
<code>\Uchar</code>	19
<code>\Ucharcat</code>	19
<code>\vadjust</code>	12
<code>\vfi</code>	8
F	
<code>fi</code>	8

Test source for FAM256 patch

本ソースは山本和義氏による「数式 fam の制限と luatex」(qa:52744) 中のコードをベースにしたものである。

■ More than 16 math font families.

```

ABCDEF GHIJKL fam = 19
AaAbAcAdAeAfAgAhAiAjAkAlAmAnAoAp fam35
AaAbAcAdAeAfAgAhAiAjAkAlAmAnAoAp fam51
AaAbAcAdAeAfAgAhAiAjAkAlAmAnAoAp fam67
Aa fam68 Ab fam69 Ac fam70 Ad fam71 roman

```

■ \omathchar etc.

```

\mathchar"7F25° : %, \omathchar"7420125° : %
meaning of \langle: \protected macro:->\delimiter "426830A ,
meaning of \lx: macro:->\odelimiter "4450068"030001
\lx° : h, \bigl\lx° : ), \Bigl\lx° : )
\the\mathcode'\f: 7166, \the\omathcode'\f: 7010066 (どちらも 16 進に変換した)
t>>>>)) e e
√, ρ √a, ρa √V f dμ, √V f dμ

```

\odelcode primitive による **delimiter code** の取得はうまく動かない：
`\the\delcode'\|`: 2532108, `\the\odelcode'\|`: -1 (どちらも 10 進)

■ Infinite level “fi”

■(fi)■(fil)■(fill)■	(filll)	■
■(fi)■(fil)■	(fill)	■
■(fi)■	(fil)	■
■	(fi)	■
	(fi)	(fi)
		(fi)
		■

■ 65536 registers

fuga! a 漢字仮名df T_EX ほげほ_EX
589